

---

# 魔法少女リリカルなのは～音撃を使う鬼神～

オプティマスプライム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜音撃を使う鬼神〜

### 【Nコード】

N0501S

### 【作者名】

オプティマスプライム

### 【あらすじ】

リリカルなのはの世界に来てしまった鬼《新藤誠》の魔法と音撃が放つ物語です。

完結編に向け奮闘中です!!

見てくれたかたは何か感想などがあればどうぞ!!

前回の小説から続きを見たい方は、鬼神と呼ばれし戦士を見てくだ  
さい！！

## ブログへこれが、響鬼（前書き）

機種変更で、別投稿になりました。

これまで読んでくれた方。

お待たせしました。

ユーザ登録はこちらからお願いします。

白米さん、武のあだ名集。もう一回お願いします!!

## プロローグへこれが、響鬼

12月22日

海鳴市近海海上

「マコツチ！？マコツチ！？おゝい！起きろー！ー！」

巨大化した茶色大鷲に先ほど、闇の書の意味から弾き出された誠をフェイスオフ状態のシュウキがまっ逆さまに落下しているの誠を拾い上げた。だが、誠は目をつむっており、気絶していた。

仕方ないのでシュウキは誠の頬を平手打ちでビンタする。

「っガッ！？な、何してんだお前！！」

ビンタされた頬を押さえて、シュウキに叫ぶ誠。フェイスオフとはいえ、鬼の力は健在である。

「昼寝タイムは終わりだぜマコツチ」

「誰が昼寝だ！？俺は！！………って、はやて達は！？」

「落ち着けマコツチ。俺も状況はよく掴めてないけど、さっきなのはちゃんとフェイトちゃんが砲撃魔法で彼女（闇の書の意味）を攻撃したら、白い光が出たと思ったらいきなりマコツチが落ちてきたんだよ」

「白い光？だとしたら、はやてとリインフォースは！？」

「リインフォース？」

「夜天の書の名前だ！で二人は？」

「はやてちゃん達ならあそこだけど」

シウウキが指差した方向を見る。そこには、はやてが槍のような杖を持ち、騎士甲冑を見にまわっていた。そして、その回りには。

「シグナム、ヴィータにシャマル、ザフィーラ！？」

そこには、ヴォルゲンリッター全員が復活を果たしていた。はやてが脱出と同時にヴォルゲンリッター全員のリンカーコアを送還した

ため、破損した守護騎士システムを修復した。

ちょうど今、ヴィータが泣きながらはやてに謝っている所だ。

「何だか、よくわからないけどよかつ……………って何だあの巨大な黒いのはああああ!？」

シウキが今度ははやて達の後ろにある巨大な黒い物体を見て絶叫する。

「お前気付いてなかったのか？」

「いや、マコツチを拾い上げるのに目がいつてたから……………」

「マコツチじゃない!!あれはな『『誠<sup>くん</sup>!』』!?!?うわっ!？」

突然、耳元で名前を呼ばれて驚く誠。そこには、さっきまで向こうにいたはずなのは、フェイト、はやてがいた。その後ろには、ヴォルゲンリッターの面々、アルフ、ユーノがいた。

「お前たち、いつの間にこっちに!?!?どうみても距離があるだろ!

「！」

「そんなことは、今はどうでもいいんや！！」

「誠、大丈夫なの！？」

「誠は馬鹿だよ！！こんな無茶して！！心配したんだよ！！」

はやてが誠の言葉を無視して、なのはとフェイトが涙目で声をかける。

「だ、大丈夫だ。大した傷はないし」

「でも、頭から血が！？」

「え？だあああああ！？そうだった、すっかり怪我が治ってるって勘違いしてた！！」

頭を抑えて出血を止める誠。見た目は重傷なのに、今まで忘れてたで済ます誠は一体……

「誠くん待っててな！！シャルお願いや！！」

「はい！！クラールヴィントお願い！！」

シャマルの指にはめている指輪が光ると誠を包み込んだ。

すると、誠の傷が治癒されていく、ご丁寧にボロボロになった服まで。

「傷が………ありがとうシャマル」

「いえ、誠くんには助けて貰ったからお安いご用よ。それにこれが私の本業だから」

シャマルに礼を言う誠。

すると、先ほどからシグナムとヴィータがモジモジしているのに誠が気づく。

「ま、誠………その、私は………」

「あたしも………その」

「言いたいことがあるなら、あとで聞くぞ？それより、今はあれだろクロノ？」

「その通りだ。みんな聞いてほしい」

クロノが上空から現れる。みんながクロノの方を見る。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。時間がないので簡潔に説明する。あそこの黒いよどみ。闇の書の防衛プログラムがあと数分で暴走する。僕らは何らかの方法で止めないといけない。一つは極めて強力な氷結魔法で停止させる。二つ目は軌道上に停止させている艦船アースラの魔導砲で消滅させる。アルカンシェルこれ以外で他にいい手段はないか？」

クロノがあらかたの説明をした。

シヤマルが異論があるようで手を上げた。

「えーと、最初のは多分無理です。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん」

シグナムが付け足すように続ける。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所にアルカンシエル射ったら  
はやてのぶっ飛ぶじゃんか！！」

ヴィータが手で×を作って、否定する。

「ユーノくん。アルカンシエルってそんなに凄いのか？」

シュウキがアルカンシエルのことをユーノに聞く。

「発動地点を中心に空間湾曲させて消滅させる。って言えばわかり  
ますか？」

「はあ……わからない」

「要は、波動砲が射たれるってことだ」

誠がシュウキに言う。

「何！？そんなもん射ったらとんでもないことになるだろ！？」

そう行ってユーノの肩を掴んでブンブンするシュウキ。ユーノは目

を回す。

まあ、アルカンシエルがとんでもない武器と知ったなのは達は反対の声を上げる。

「僕も艦長もアルカンシエルなんて物は使いたくないんだ。他に方法があれば、それを優先したい。何かないか？ 守護騎士たちにも聞きたい」

「すまない、あまりいい案はない」

「我らもあまり、防衛プログラムの暴走に立ち会ったことがないのだ」

「そうか……………」

残念そうにするクロノ。暴走臨界点まであまり時間がない。

すると、痺れをきらしたアルフが空中であぐらを書いて言う。

「あゝも、焦れたいなあ。みんなでガツンとぶっ飛ばすわけにはいかないの!？」

「ア、アルフ。そんな簡単な話じゃ（汗）」

シュウキから解放されたユーノがアルフの無茶発言に冷や汗をだす。

「いや、アルフのはいい案はだ。俺もそれしかないと思った所だ」

誠がみんなの方を見て言う。皆はアルフの無茶発言が通ると思わず啞然とする。

「ってマコツチ。確かにぶっ飛ばすことに越したことはないけど、相手は未知数なんだぜ？」

「あのな？俺たちは鬼だぞ。常にワケわからん相手をしてんだぞ俺たちは。あの防衛プログラムは色々な生物の融合体だからな」

「え？そうなの？」

「えっと、集めたリンカーコアが魔法生物がほとんどですから……」

「要は、様々な魔化魍の融合体又エと一緒に考えてろ」

「ああ。又エね」

「「「（又エって何なんだろう……）」」」

又エを知らないのは達は顔を傾げる。

「そついえば、あの防衛プログラムにもバリアとか張ってあるのか？」

誠が守護騎士とはやての方を見て質問する。

「うん。防衛プログラムのバリアは魔法と物理の複合四層式や」

「なら、そのバリアを破壊するにははやて達の魔法攻撃で破壊して貰うしかないな」

「ちょっと待て！？まさか君は！！」

クロノが誠が何をするきなのかわかった。

「そして、防御を失った防衛プログラムに俺が音撃でぶつたおす。勿論、お前も一緒に突撃だぞシュウキ」

「えええっ！？俺もか！？」

「当たり前だ、お前以外誰が行くんだ？」

「いや、まあそうだよな。わかったよ」

「決まりだな。というわけだからなのは達は……」

「何いつてるの誠くん！？死んじやうかも知れないんだよ！！」

「今回の相手はこれまでとは違うんだよ！！誠は無茶ばっか、しすぎだよ！！」

「そうや、誠くんは私らを助けてくれたんやから、今度は私らが助ける番や！！」

なのは、フェイト、はやてが続けて誠の無茶な行為を止めようとする。

「勘違いするなよ。俺は別に死に行くわけじゃない。なのはにフ  
エイトにはやては忘れたのか？俺は……」

誠は、懷から何かを取り出す。シュウキはそれを見て「えっ!？」  
と声をあげて驚いた。他の者は何なのかわからずただ見た。

誠はそれを軽く振ると、二本の棒が出る。それを自分の指に軽く当  
てる。すると、キイイイインと音が共鳴する音になる。それを額  
にかざすと、誠から紫色の炎が上がる。回りの者はは突然の出来事  
に驚いた。しかし、この現象をなのはとフェイト達は知っている。  
しかし、あの時は真っ赤な炎だったはず。

「マコツチ。まさか……」

そして、誠は纏った炎を振り払う。そこには、縁取り・腕の色は赤  
色で体色は紫色をベースにした音撃戦士。その名は音撃戦士なら誰  
もが知っている鬼。名は……。

「俺は……鬼…音撃戦士《響鬼》だからな」

遂に現れた音撃戦士・響鬼。そして更に別の世界の住人は彼のこと  
を仮面ライダー響鬼という。

『少年………響鬼。託したからな………』

次回続く

プロローグへこれが、響鬼（後書き）

次回……

決戦…防衛プログラム

ついに響鬼へと変身を成し遂げた誠。

そして、解放する響鳴響鬼とは？

感想待っています！

## プロローグ・弐（前書き）

名言集 アニメordドラマ

今回は

『人々が思い続けてくれる限り……俺たち仮面ライダーは不滅だ！』  
『《オーズ・電王・オールライダー・レッツゴー仮面ライダー／仮面ライダー1号／藤岡弘、》』

映画見てきました。確か、こんなセリフだった気がします。

内容はネタバレなので余りいいませんがオールライダーでした（汗）

## ブローグ・式

「マコッチ……どうやって、響鬼に……」

「シュウキ、今は無駄話をしてる場合じゃないだろ。皆も突っ立ってないで、始めるぞ。だろ、クロノ？」

「え…ああ、そうだ。皆、とりあえずここは誠を信じてやろう」

「そうだな」

「じゃあ、まずはあのバリアを破壊しないとな」

「それなら、あたしたちがサポートに回るよ」

「うん」

「ああ」

アルフ、ユーノ、ザフィーラがサポート班として援護に回る。そして、なのはたちもバリア破壊として、攻撃する準備を始める。

しかし、まだ三人娘は誠の案には納得していない様子だが…

「まだ、納得してない顔だな」

「当たり前だよ。誠は…」

「俺はお前らを信じる。だから、お前らも俺を信じてくれ」

「誠くん……」

「なら、きいつけてやー!」

「ああ!!--そっちは任せだから、ほら行くぞシュウキ!!--」

「って、それ俺のディスクアニマル!?勝手にてな付けるなよ!?!」

誠はそのままシュウキの茶色大鷲を連れて、下へと降りて言った。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。私ね、誠くんには助けて貰ってばかりだから……」

「わかってるよ、なのは」

「うん、だから誠くんが戦わんでええように、私らで防衛プログラムを止めるんや……」

「うん、行こう……」

なのはの掛け声と共に、必ず防衛プログラムを倒すと誓い合うフェイトとはやて。

三人はそれぞれのポジションに向かっていく……

SIDE フェイト

「始まった……」

ついに、防衛プログラムの暴走が始まった。

やっぱりユーノが言った通り、色々な魔法生物の融合体みたいだ。  
こんな大きい相手に誠とシユウキが相手をするなんて、絶対無茶だ。  
でも、誠はとっても強い……

別に誠の言葉を信じていないわけじゃない。私たちを信じてくれるんだ……あれ、これって私を信じてくれるってことだよね／／／

あう、何、こんな時に変なこと考えてるの私は／／／

うつん、この気持ちが消えないのが良いんだ／／／  
今度こそ、私が誠を助ける番なんだ！！

「次、テストロッサちゃん！！」

！！私の番だ。なのはやシグナムが開いてくれた道。無駄にはでき

ない！！

でも、なんでだろう。誠に何か嫌な予感がするのは……

S  
I  
D  
E  
  
O  
U  
T

「やっぱり、結構ごちゃごちゃな奴だな」

予想してた通り色々な奴が混ざってるようだな。

「でも、マコツチ。確かにあの防衛プログラムは又エみたいに色々な奴が混ざってるのはわかったけど、本当に勝機はあるのか？」

「マコツチじゃない。あるから、やりにいくんだろ。大丈夫だ、なのは達がきつとバリアを破壊してくれる。そうしたら、俺とお前が全力で音撃打を打ち込む。シュウキは」

「衆牙破裂を撃ち込むって事か？」

「そうだ」

「でも、清めの音が通じる相手なのかな。あれは魔化魍じゃないだぞ？」

「絶対に効くさ。音撃は魔化魍以外でも使うことができる。例えばそれでも倒せなくても、俺にはまだコイツがある」

ぶら下げている音叉・音角を手につつ。すると、音角が一瞬光ると、一振りの刀が握られていた。

「それ、鳴刀？でも、まさかそれが切り札？マコツチには装甲声刃があるだろ？」

シュウキも鳴刀の存在は知っているらしく、あまり驚かない。しかし、鳴刀はあまり使われない武器。  
シュウキも、まさか鳴刀が切り札なのかと少し拍子抜けの顔になる。

「確かに装甲声刃もあるが、俺はこれを試す。それにこれは鳴刀じゃない」

「え？」

「見てればわかる」

再び。音角に戻し、防衛プログラムの方を見る。

ちょうど、今まさになのは、フェイト、はやての砲撃魔法が炸裂している場面だ。

「うおっ！？こつちまで、余波が！！」

「バリアのついでに防衛プログラムも一緒に消えてくれたら有難いな」

「それだったら、うれしいけどな……」

砲撃魔法でバリアは消し飛んだみたいだが、やはり本体ははやてやクロノが石化や氷結魔法を使っただけで、中から新しいのが出てくる。

やっぱり内部からだな

「行くぞ、衆鬼！！」

「おう！！久しぶりに大暴れだ！！」

「お前、武みたいに不吉なことを言うなよ！！」

「気合いれだよ！！気合いれ！！」

まったくコイツは……

まあ、いいか。今回の敵は大暴れだなんだとかじゃないと、やっていけないからな!!

S I D E   O U T

「はあ………はあ………はあ………そんな、私たち三人の魔法でもまだ、倒せないの……」

自身の魔力を全て出しきったスターライトブレイカー。しかし、すぐさま修復プログラムが働き消し飛んだ部分を修復していく。

なのはもそうだが、フェイトとはやても誠とシュウキ（特に誠）に負担をかけまいと魔力を大幅に削ったため、肩で息をするほど。飛んでいるのがやっとなほど。

「やっぱり、誠たちには無理だよ……」

「誠くん……」

『誠………』

はやてにユニゾンしているリインフォースも心配する。

その時、修復していく防衛プログラムに近づいていく飛行物体が見える。シュウキの茶色大鷲だ。背には誠（響鬼）とシュウキ（衆鬼）が乗っている。

「修復途中ならチャンスだ！！はあっ！！」

響鬼が先に飛び降りる。降下している時に、ベルトにある音撃鼓を取り外し防衛プログラムの甲羅のような部分に投げる。甲羅に着いた音撃鼓は回転しながら巨大になっていく。

響鬼もその上に乗り、音撃棒・烈火を構える。

「行くぞ！！音撃打・豪火連舞の型！！」

交互に音撃棒を降り下ろし初め、次に同時に音撃棒を降り下ろす。そして、最後に音撃棒を高く降りあげて、音撃鼓を叩きまくる。音撃打『火炎連打』『一気火勢』『猛火怒涛』の3つを複合させた最強の音撃打だ。

叩いているだけで、音撃鼓からの衝撃波がクロノの魔法で凍結している海に亀裂が入り、空間が歪んで見える。

音撃打を喰らっている防衛プログラムは清めの音で内部から破壊されているのにもがきだす。

あらゆる部位から腕やら触手が飛び出し、響鬼を退かせようとする。

しかし、

「悪いが、こっちも忘れんなよ！！」

茶色大鷲に乗っている衆鬼が音撃管・衆牙を出し、部位から出たのを狙い射つ。

誠に襲いかかるのを優先して狙い、誠のサポートに回る。

その様子を見ているユーノ達は、取り付いて攻撃をする誠にただただ驚く。

「すごい……こっちまで、太鼓の轟音が」

「今さらだけど、アイツ、本当に何もんなんだ」

「はあああああ！！はあっ！！」

最後の叩きを入れる響鬼。久しぶりに全力で叩きこんだ音撃。防衛プログラムは音撃を叩きこまれ部分部分が爆発し始める。

「（やったか）……………くっ」

しかし、破壊された部分から新たな身体が再生していく。だが、再生はされていくが超速再生はできないようで、ゆっくりと再生していく。

「再生なんか、させるか！！」

音撃鳴を衆牙に取り付け、必殺技の構えに入るシュウキ。

「音撃射・衆牙破裂！！」

トランペットを吹くように、それに似合う演奏が聴こえる。衆鬼が攻撃しているのは、響鬼の攻撃で内部が露出している先に見える大きな輝き。そう、防衛プログラムのコアに直接攻撃をしているのだ。響鬼が固い甲羅を破壊してくれたおかげ、攻撃がダイレクトにコアに届く。

今まで、一番の苦しみをあげる防衛プログラム。

しかし、巨大な尻尾のような物が衆鬼が乗る茶色大鷲めがけて降り下ろされる。

「避ける衆鬼！！！！」

響鬼が尻尾に気付き、衆鬼に大声で呼び掛ける。

「はっ！？ぐあっ！？」

衆鬼も気付き、茶色大鷲で避けさせようとするが尻尾が茶色大鷲に当たり、衆鬼が放り出された。

そのまま、海上に一直線に落ちつく。

「シュウキさん！！はあっ！！」

ユーノが手をかざし、シュウキの落ちてくるであろう場所に魔法陣

を展開する。衆鬼は魔法陣でバウンドするように受け止められた。

「危なかった。ありがとうユーノくん!!」

「いえ、これぐらい!!」

「でも、せっかくの攻撃のチャンスが……あつ」

空から茶色大鷲のディスクが落ちてきた。

それを手に取る衆鬼。頑丈にできている茶色大鷲が元のディスクに戻る。

ディスクアニマルは手入れをしなくてはいけない。いつもなら、本部や支部で手入れをして貰っているが、この世界ではそれがないしできない。限界が来ていたのだ。

「（マコツチ……どうするんだ？いくら響鬼でも、鬼神じゃないんだ。なんでアームドにならないんだ？何か策があるなら早く出した方がいい!!）」

衆鬼が早めに防衛プログラムを倒した方がいいと思う。そして、なぜ鬼神（もとい装甲響鬼）にならず、響鬼で挑んだのかもわからない。

しかし、響鬼の余裕の物言い。

「さてと…………やるか。行きますよ響鬼さん」

キイイイインー！

装甲声刃を出し、腰にぶら下げている音角を刃に叩く。

音角は一瞬光ると、刀《響鳴剣》の姿になる。

次の瞬間、響鬼の身体から紫色の炎が舞い上がる。

同時に右手に持つ響鳴剣も連動するように紫色の炎が出る。

「行くぞ……………響鬼・響鳴！！」

つづく



## プロローグ・弐（後書き）

次回、ついに明かされる《響鳴》の力。

その力を解放した誠が防衛プログラムに止めをさす！！

しかし、誠は……

---

今回は、自分が考えた響鬼の新しいフォームです。

そして、マテリアル編………外伝編でやりまーす！！つまり、本編とは関係なくやります。

誠とシュウキが主役です。

そして、更にその後は、第三章が始まり音撃戦士が続々登場します！！

感想や意見待ってます!!

A・S 編第33話〈その名は響鳴響鬼〉（前書き）

今回は短いです

## A・S 編第33話へその名は響鳴響鬼

「うおおおおおー！！！！！！」

響鬼の身体から、燃え盛る炎。その炎が響鬼の鎧に変化を表している。

装甲とは違い、それほどの重装ではなく、より軽々しくなった姿。額の部分は鬼の模様ではなく《響》と印されており、背中には、先ほどの響鳴剣が更に姿を変えた、装甲声刃のように近代的な剣になり背中に背負っている。

「はあああつ！！！！！！！！」

炎を振り払い、新たな姿に<sup>フォーム</sup>変身した響鬼。  
響鳴響鬼、または響鬼・響鳴フォームである。

「さあ、この姿が何分持つかわからねえから、一撃で終わらせる！！！！」

背中に背負っている響鳴剣を抜く。  
両手で構えて、闇の書の防衛プログラムに向き合うようにする。よ

く見ると、刀身が小刻みに震えて青白く光っている。

「行くぞ……音撃響鳴・響震式閃!!」

響鳴剣を横一文字に振りかぶり、青白い斬撃が防衛プログラムに放たれた。振りかぶると同時に『キイイイイン!!』と言う大きな音が響く。余りの大きさに、見守っているのはたちは思わず耳を閉じる。

「くうう!!耳が!!」

「なんだよ、この高い音は!？」

ヴィータには嫌な音なのか、涙目になりながら叫ぶ。

「シュウキさんこれは!？」

「わからない!!俺も初めてみた!!」

シュウキも響鬼に起こった変化に驚いていた。

そして、響鬼が振りかぶった斬撃は防衛プログラムに当たる。

しかし、斬撃は当たると同時に消えた。

これを見ていたなのは達は「え？」と言った。

シュウキも「まさか、失敗？」と言っている。

しかし、刹那

突然、防衛プログラムの身体から亀裂が入る。その亀裂が様々な箇所に現れ、まるで音がその響きを止めないようにどんどん伝染していく。そして、防衛プログラムはバラバラに砕け散り、跡形もなくなっていく。再生しようとするが、全くできなくなり、その身体が最後の欠片になるまで音が響き渡っていた。

「え……終わったの？」

なのはが啞然とするようにポツリと言った。

「凄い……………本当に凄いよ誠……」

フェイトがゴクリと息を飲み、防衛プログラムがあった場所を見つめた。

「……今さらやけど鬼って、悪いイメージがあっただけ。そんなちやうんや。私にとっては、とってもカッコイイ鬼さんや」

少し涙目ではやてがクロノの凍結魔法でできた氷の上に立っている誠を見て言った。

「ったく、マコツチ。響鬼に変身しただけでも驚くのにあんな凄い技持ってたなんて……（ますます煉鬼の闘争本能剥き出しになるな……）」

若干冷や汗で思う。

皆がそれぞれ安堵の気持ちで誠のいるところまで行こうとする。なのは、フェイト、はやては少し早めに向かって行く。

しかし、

「ぐああああああ！！！！……？？？」

突然、誠が叫び声をあげる。響鳴剣を手放し、身体中から火花と鮮血が鎧から吹き出す。

そのまま変身が解け、血だらけの誠が氷上の上に倒れた。

なのは達は一体何が起きたのかわからなかった……

ただわかるのは誠が真っ赤になって倒れているだけ……

それを見たフェイトは思考が停止していた。

「あ……ああ………ま………まことおおおお………!!!!……!!!!」



A・S 編第33話へその名は響鳴響鬼（後書き）

次回

防衛プログラムを完全に消滅させた響鬼。

しかし、突然の重症に倒れた誠。

なぜ？

そして、始まる新たなる物語。

次回 A・S 編完結！！！！

感想など待ってます！！

その前に、技とか主人公の新設定とかやるかな？

そろそろコイツらでるか……

とある山岳地帯……

武「おおおおおおおおお！！！！アイツはどこなんだああ！！」

礼羽「誰か止められないんですか？」

勇「俺だつて止めたいけど。兄さんがあんなつたら……誠さん、お願いですから早く帰ってきてください！！！」

A・S編第34話〈始まりの響き〉前編（前書き）

A・S編 完結前編です！！

長かった……………

A・S編第34話〈始まりの響き〉前編

『少年。この《響鳴》を使う時は、必ず少年は致命傷の傷を負う』

『必ずですか？』

『ああ。本来この技は強力すぎる上に、非常に危険な諸刃の剣だ。本当なら相当の修行と鍛練を詰まないといけない』

『なら、《響鳴》はすぐには使えないんじゃない？』

『いや、使えるには使えるんだ。だがな、技の反動が凄まじいんだ』

目を瞑り、手を組む響鬼。

『反動ですか？一体どんな技なんですか？』

『少年は音が鳴ったら、暫くは響くのは知ってるだろ？』

『反響ですよ？』

『まあ、そうだな。その剣はそれを瞬時に発動できる。技を発動させたら、斬られた者は斬撃が全身に周り音がなりやむまで斬撃が続く』

言葉だけでは簡単な事に聞こえるが、実際はとんでもない最強の技だ。

技を食らえば音がなりやむまで永遠に切り刻まれ続けるのだ。最終的には欠片をも残さず消え失せる。

しかし、反面

『少年、もう一度言うが修行も鍛錬も出来ないお前がこの技を使えば確実に……』

『わかってますよ。響鬼さんだってそれを承知で俺に教えたんですよ？大丈夫です、俺は伊達に鍛えてませんから』

『ふつ、相変わらずだな。少年、しっかりやれよ。怪我したら、怪我したらだ』

『響鬼さんだって、相変わらずアバウトじゃないですか』

『ハハッ、お互いな』

『ええ……………』

そうだ、俺はいずれはこの技を習得しないといけない。

もっと強くなるためには……………

「う……………ん……………はっ！！ここは、いつつう！」

ベッドの上で目を覚ました誠。飛び起きるが右腕に激痛が走る。左手で思わず右腕を握りしめる。ゆっくり手を放し、右腕をだらんとさせた。いつの間にか、患者の服を着せられており、身体や頭に包帯が巻かれていた。

痛みは今のところ、右腕の激痛だけだ。

誠は自分のいる部屋を見渡した。そこには、フェイトとなのはが自分のベッドで眠っており、隣のベッドにはは yet ヴィータが一瞬に寝ていた。

なぜかリインフォースが自分のベッドに潜りこもうとしている一歩

出前で寝息をたてて寝ていた。

「うん……誠…誠!!」

誠が起きて起きたのか、フェイトが目ですりながら起きた。まだ寝ぼけてると思いきや、誠を見るなり覚醒して抱きついた。

それに続くかのように、次々と目を覚ます面々。

「誠くん、起きたんだね!!」

「おめえ、大丈夫か!?!」

「誠くん、ほんまに殺生やで!!」

「誠、無事で良かった!!」

なのは、ヴィータ、はやて、リインフォースが一気に誠に詰め寄る。まあ、はやては四つん這いだが。

「ば、ばか!! そんなに近づくな!! ってはやてどこに乗ってんだ!!」

「こじかないんやもん!!」

はやてが馬乗りになって誠に言う。どこにそんな力があるんだ。

すると、病室の扉が開き次々と人が入って来た。

「誠さん、目が覚めたんですか!!良かった!!」

「ったく誠!!あんただけ無茶苦茶な奴なんだい!!」

「でも、傷は意外に浅かったですから」

「シャルに感謝してよ誠くん?」

「お前が無事で良かった。なっ、リインフォース!!貴様、どさくさに紛れて誠に何を!!」

「なっ!!?わ、私は別に何も!!ノノノ」

上からユーノ、アルフ、シャル、エイミィ、シグナムが入って来た。

最後にクロノ、リンディ、ザフィーラ。

そして……

「マコツチ……！良かったああああ……！」

何かを手に持ちやって来たシュウキ。

「マコツチじゃない……！ああ、ちよつといい加減離れてくれないか  
フェイト？ついではやて達も」

誠が未だに抱きついたままのフェイトに言う。

「うっ……誠がいけないんだよ……あんな事に……」

少し涙目のフェイトがゆっくり放してベッドから降りる。

「悪かったよ。まさか、身体がぶっ飛ぶなんて思わなかったからな  
……！」

頭に左手を当てて、笑いながら言う誠。  
そんな誠の態度になのはとはやては。

「笑ってる場合じゃないよ！！死んだかと思っただよ！！」

「そつや！！いきなりあんな血い流して、とっても心配したんやで！！」

涙目で本当に怒ってるのはとはやて。

確認することではないが、なのは達は9歳、誠は17歳である。

「あ……えつと……」

誠はどうしていいかわからなくなる。

因みにフェイトを始めリインフォースやヴィータ、シグナムもはやて達と同じ気持ちだ。

そんな誠にシュウキが助け船を出す。

「まあまあ、誠が大丈夫って言ってるんなら。それは大丈夫なんだよ。ほら、皆あれから何も食べてないから、俺がお菓子作ったから皆食堂に来なよ」

「そつね。皆お腹が空いたでしょ？シュウキくんのを頂きましょう？」

「でも、誠くんは？」

なのはがおそらくまだ歩けないであろう誠を気遣う。

「大丈夫だって、俺が車椅子とか使って持っていくから」

「俺は荷物か！！」

誠がシュウキに向かって突っ込む。

そして、シュウキとリンディの言葉にしぶしぶ納得したなのは達は食堂へと向かっていく。

「さてと、俺もお前が作ったお菓子でも食べるか」

そう言ってベッドから降りる誠。

「待てよ誠。なんだよあの技？それにお前右腕が少し震えてるぞ？」

シュウキが誠の異変に気づかない訳がなく。誠に問う。

「あの技は音を用いた斬撃。としか言いようがない」

「言いようがないって！！あんな技見たことないぞ！！それに音を用いるって！！それにあの姿にお前の傷！！」

「詳しい事は俺もあんまりわからないんだ。ただわかるのは、もうあの技は使わない。それだけだ」

ゆつくりと立ち上がり、壁にかかっている自分の着ていた服に着替え始める。

「使わない？もう何の事かわからないぞ？」

「俺もわからないんだから、いいだろ？」

「誠、俺達音撃戦士が一番してはいけないのは、自分一人で背負い込むことだぞ？無理して怪我を隠すとか、仲間に迷惑がからないようにすることが一番いけないって、言ってたの響鬼さんだろ！！その右腕はなんだ！！」

「ぐう！！」

シュウキが右腕を掴む。誠は顔が一瞬歪む。

「あの技使ったからだろ？」

「ああ、そうだ。最後に右手で振りかぶったから反動が右手や右腕に集中したんだよ」

「反動？なんだその技は？」

「響鬼さんにでも聞いてみる」

「いないからマコツチに聞いてるんだろ！！そんな障害があったら、誰が一体俺の助手をするんだああ！！」

「心配してたのそれか！！？？ってかお前の弟か妹に頼めえ！！」

「カガリやカズラは食べて貰うんだよ！！」

「お前鬼辞めて、パティシエになれ！！」



そのあと、誠とシュウキは部屋を出て食堂へと足を進める二人。その間に誠がシュウキに事情を説明した。

「なるほど。古から伝わる奥義を使っただけか」

「ああ。だから……もう響鳴は使わない。俺が鍛え治して、より深い音撃を習得してから使うさ」

「だな。でも、あんなデツカイのを一撃で倒したのは凄かった。いや、もったいなくなるかと思ったぞ」

「いや、実際は鬼神でも倒せた敵だ」

「え？」

「鬼神覚声で斬るのも出来たけど、あれだけの再生能力。でも、なのは達が頑張ってくれたんだ。だから、賭けにでるより確実に倒せる方法を使っただけだ」

「へ。って俺は援護する必要なかったんじゃないのか？」

そう考えるならシュウキは別に援護は向かって来ないで良かったの  
ではと思う。

「……………誰が囿するんだ？」

誠が真顔でシュウキにいい放つ。

「囿かよー!？」

「はいはい、冗談だ。ほら、着いたぞ」

手を振って冗談をアピールする誠。

「（絶対囿だったな…………）」

と思うシュウキ。

食堂に付くと、皆既に座っておりテーブルには既にデザートが並ん

でいた。

「チヨコバナナか。案外、シンプルなの作っただな」

そう言って、なぜかぽっかりと皆が座つついる真ん中が空いている席に座る誠。

囲むようになのはが右にフェイトが左にはやてが真正面に来るように座っていた。

「誠くん、遅かったね？」

「着替えてたんやろ？」

「正解」

誠が左手でフォークを掴みチヨコバナナに指す。

「あれ誠って左利きだったけ？」

フェイトが誠が左手で食べているのに不思議がる。

「俺は両利きなんだ。まあ、たまには左手でもいいだろ？」

「へ」

「ところで、君が防衛プログラムを倒した時に使ったあの技は一体何なんだ？」

皆が一番聞きたいことをクロノが聞いてきた。  
その言葉に皆の視線が誠に集まる。

「（来たよ……）」

誠が心の中でため息をつく。

「俺の音撃を使った斬撃攻撃。それ以上でもそれ以外でもない。それだけ」

「なっ！？そんなので、納得できるわけ！！」

クロノが立ち上がり、当然納得できるわけもなく反論しようとする。

「そうだ、誠。お前が使った技は明らかに異常な力だった。それにあの時の苦しみ方は……」

「シグナムの言う通りや。誠くん、なんか隠してるやろ？」

「何も隠してない。それより、はやてたちこそ大丈夫なのか？」

誠がよそ見をしながら、はやての質問を流して話題を変えた。

「え？私らか？」

「ああ、処遇だ」

「それなら、彼女たちは管理局に奉仕という形で入局して貰うことになっている」

「まあクロッチが色々と手を回してくれたおかげだね」

シュウキが横目でクロノを見て言った。

「クロッチじゃない！！言うておくが君たち二人はアースラで色々

として貰うからな」

「はあゝ！？」

「色々ってトイレ掃除とか？」

「それもあるな。君たちがぶっ壊してくれた扉の件もあるし」

クロノが怒りマークを浮かばせて、腕を組む。

「ああゝ、そういえばあったな。シュウキを助けるために倉庫の扉破壊したな」

「やっぱりバレてたんですよ」

ユーノが呆れるように言う。

「ともかく君たちは未だに次元漂流者扱いだから、守護騎士たちやはやてみたいに管理局に入れる事はできないんだ。だからと言って罪になんかできないんだこれだけの処分になっただけでもありがたく思っんだ！！……………って皆は！？」

いつの間にか、ユーノ以外いなくなっているのに気がつくクロノ。

「皆、それぞれ帰っていったんだよ。『話なんか聞いてられるか』  
って」

「まったく、逃げたな」

## 海鳴海浜公園

「皆、忘れてると思うけど明後日はクリスマスだ！！感謝を込めて、俺が最高のクリスマスケーキとデザートを用意してやろう！！」

シュウキが滑り台の上に乗り、高々と宣言する。

「場所はどうすんだ？」

「それなら、私たちが住んでマンションなら……」

「翠屋の方が広いよ!!」

「私の家も広いから、クリスマスパーティーはそこでや!!」

三人がどこでやるかを言い合いを始めた。

「おいおい、その前に三人にはやることがあるだろ？アリサちゃんやずずかちゃんに話さないといけないんだろ？それになのは何時までも黙ってるわけにはいかないだろ？」

エイミイから聞いた話だが、あの戦いの時にアリサとずずかが目撃してしまっているらしい。更に、なのはとフェイトも本格的に管理局員になるらしい（というか、子供を雇うなんて余程管理局は人員がないんだなと思う誠）ので桃子や士郎に言わないといけない。

「あ、うん。そうだね、ちゃんと話さないといけないもんね」

「そうだ。それに今日はもう遅いし、また明日にしよう。俺も傷治さないといけないしな」

「そつやな、なら皆私の家に集合や!!」

はやてがそう言うと、皆もそれに納得し、それぞれが帰路に着こうとしていた。

しかし、再びはやてのある言葉でなのは、フェイトは反論することになる。

「さつ、誠くんも一緒に帰ろうな？」

「え？」

「はやて!!？」

「はやてちゃん!!？誠くんは私の家で生活してるんだよ!!」

「やから、今日から誠くんは私の家で……………」

「主はやて、誠を泊まらせるんですか？」

なぜかリインフォースが話に乗ってきた。

「う？リインフォースも誠くんが来るの賛成なんやる？」

「え？は、はい！！／／／」

「ってはやてちゃん！！勝手に話を進めないでよ！！」

「そっだよ、はやて！！今日は私の家に呼ぶんだよ！！」

とうとう騒ぎだすのは達。

「ハハハ（俺はアースラでもいいんだけどな……………眠い）」

当の本人は、ブランコに乗りはやて達の話苦笑いで見ていた。

祝5000PV突破記念!!音撃戦士・登場人物之巻へ第三章における二人の士

久しぶりの投稿。

待たせた皆さん。

今回はこれからの主人公設定です。

祝5000PV突破記念！！音撃戦士・登場人物之巻へ第三章における二人の士

名前：新藤 誠

年齢：17歳（因みに誕生日は1月2日）

好きなもの：辛い食べ物、登山

嫌いなもの：苦い食べ物、ホラー系、機械類（嫌いと言うより苦手）

鬼名：響鬼、または鬼神

装備：変身音叉・音角、音撃棒・烈火、音撃鼓・火炎鼓、音撃増幅  
剣・鬼神装甲声刃、音響鳴震刃・響鳴剣

人物：この物語の主人公。元々は《音撃戦士と魔化魍が戦う世界》  
の住人。日本中を放浪と言う名の旅をして魔化魍を退治している。  
所属は関東支部（滅多に顔を出さないが…）。

旅の途中で祠を発見し、謎の光で《リリカルなのはの世界》に行っ  
てしまう。フェイトやアルフと言った魔導師達と出会う。そして、  
フラグをばらまくメーカーで本人は恋愛に超鈍感。現在なのは、フ  
ェイト、はやて、シグナム、リインフォースが好意を寄せられてい  
る（誠は全然気づいてない）。

A・S 編終盤で響鬼に変身出来るようになった。

性格は明るく優しく、時折ツツコミもかます。余り怒らないがキレ  
ると怖い。幽霊類が大の苦手で、幽霊関連になると普段では考えら

れないほど慌て、最悪失神する。しかし、それ以外は信念、精神が強い（幽霊類は人間苦手なものは必ずあるから鍛えようがないらしい。しかし幽霊の存在は断じて信じてない）。料理は得意でカレーやシチュー類が得意（誠が作るカレーは普通より辛いらしい）。意外に機械音痴で携帯電話はメールと通話がやっと（これは師匠ことヒビキが機械音痴の影響）。

身体能力及び戦闘能力は非常に高く、鬼にならなくても音撃が打てたりでき、鬼神と言う名に恥じない強さ。が、そのせいもあってかとある人物に戦いを挑まれる。

過去は不明で、余り話そうとはしない。わかっているのは家族はある人物に殺されているらしい。そして、師匠ヒビキも死別している。

交友関係：猛士に所属し、音撃戦士たちとは仲が良い。特にシュウキとは修行時代からの悪友（シュウキは親友と言っている）。そのためのシュウキの弟力ガリと妹カズラとも面識がある。礼羽《玄鬼》とは良い弟分のような立場で、時々、二人で魔化魍退治に行ったりする。そして、一番誠を困惑させているのが六道 武で、会うたびに決闘を申し込まれている。お互い犬猿の仲だが、互いに力を認めあっているらしい（本当かどうか不明）。でなければ、強さを求める武が誠に戦いなど挑まない（過去の因縁があるのかないとか）。唯一馬が合うのは辛い食べ物系。

そして、リリカルなのはの世界ではフェイトを始め、交友が広がっている。因みに三人娘から心配や説教させられ、少し屈辱らしい（なんで9歳時に……らしい）。しかし、女の子には優しくというヒビキの言葉で言い返せない（ヘタレ化が進行）。

名前：六道 武

年齢：18歳

好きなもの：和（なんと言おう和）、強い奴との戦い、辛い食べ物  
嫌いなもの：豆類、洋（パンなんて吐き気がするらしい）

鬼名：煉鬼

装備：変身音叉・煉角、音撃棒・獄炎

人物：第三章におけるもう一人の主人公。元は大昔の人物で、現代に何らかの事象でタイムスリップしてきた。一匹狼で日本中を放浪している（というより、誠を探しだすための旅）。因みに弟の方が出来が良い。だが、戦闘バカだが、漢字は非常に強く、字が上手い。だが、現代知識に非常に乏しく、外国語が言えない。

性格：ひたすら力を求めて、強いとの戦いを好む武闘派な性格。口

が悪く、年上にも普通にタメ口（使うのは師のカブキのみ）。見てくれも不良みたいで、怖いイメージがあるが、意外に子供好き。更に何故か豆が嫌いで誠同様に普段では考えられない行動とすることも因みに誠とは意見が合わないのは有名ならしい。他人の指図を受けるのが大嫌いで、正に我が道を行く性格。

身体能力と戦闘力は誠に並び非常に高い。

過去：余り多くは語らず。弟の勇は唯一の肉親であり、普段はまんざらな扱いをしているがとても大切に思っている。しかし、元いた世界が世界な為、子供が闘うと言うのは決して認めない主義（時空管理局と馬が合うのはまずないだろう）。  
誠とは意外な因縁と関係がある………多分

交友関係：形として一様は猛士に所属している（関東支部）が全くと行っていいほど現れないが、全国で鬼と知り合っている。特にシユウキとは子供好きで、時々幼稚園や保育園に行ったりしている（という無理やり）。なのでシユウキの事を《菓子野郎》又は《誘拐野郎》とよんでいる。

そして、誠とは最早犬猿の仲で、武が勝負を吹っ掛ける↓誠が逃げる↓武が追いかける↓日本中が鬼ごっこ状態が当たり前の状況。実際、武が誠に勝負を挑むのは純粹に誠が最強と呼ばれる鬼神であるとともに、ある理由があるため。

だが、実際に二人が本気で闘うとなると、回りが焦土とかすか、両方死ぬらしい（勇談）。

なのはたちとどう絡むかは今後次第。



祝5000PV突破記念！！音撃戦士・登場人物之巻へ第三章における二人の士

鬼神「ということで今回は第三章の主人公設定だ」

シュウキ「マコツチと武が主人公かどんな物語りになるんだ？」

礼羽（玄鬼）「響鬼さんとはかく煉鬼さんが主人公になったらこの小説焼き付くされるんじゃないんですか？」

勇（影鬼）「いやいや、礼羽！！やっと兄さんが本編で活躍できる上に主人公だよ！！どんなでもない大出世だよ、こりゃあ！！」

シュウキ「勇の言う通りだ。ってか俺たちの扱いは！？」

鬼神「安心しろ。君たちは次回で音撃戦士紹介で紹介してやるよ。みんなをな！！」

カガリ（火鬼）「やっと俺もシュウ兄みたいに本編でられるのか……  
…というかシュウ兄、もう活躍したから出なくてもいいんじゃないの？」

シュウキ「おいおい、カガリ。何言ってるの？俺は出るよ！！頑張  
って活躍だあ！！」

礼羽「シュウキさん……僕たちも出ますから活躍はぐんと減ります  
よ？」

シュウキ「いやあああああ！！」

勇「あれ、そういえば誠さんと兄さんは？」

礼羽「さあ、多分今頃おいかけてこしてるのでは？」

鬼神「まあ、という事だから次にやるのは音撃戦士紹介だから！！  
その前にA・sを完結させるぜ！！だけど、闇のマテリアルの名前  
がどれにすればいい迷っている！！！！」

とりあえず、皆様にも考えてたくさん案を出すか

闇のマテリアルたちも後に重要な役割があるしな。

うん………

感想にマテリアル三人娘の名前があつたら載せてください！！

勿論、活動報告に書いてくれたユーザー様も何個でも構いません！  
！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0501s/>

---

魔法少女リリカルなのは～音撃を使う鬼神～

2011年10月8日22時15分発行